

霊場・書寫山圓教寺をあるく

書寫山圓教寺地図



1 仁王門 〈県指定文化財〉

寛文5年(1665)の建立。門は、日本の伝統的な三間一戸の八脚門で、三つ棟造り。阿吽の仁王像が霊域を守っています。



2 壽量院 〈国重要文化財〉

承安4年(1174)、後白河法皇がここを行宮にして、如意輪堂に7日間参籠したという記録が残され、山内で最も格式の高い塔頭寺院です。書写塗の器を使った精進料理を味わうことができます(予約制)。



3 十妙院 〈国重要文化財〉

壽量院と同じく江戸時代の建物。よく知られる狩野永納筆の襖絵は、特別公開日に見ることができます。



4 摩尼殿 〈国登録文化財〉

マニとは梵語で如意のこと。承安4年(1174)、後白河法皇より摩尼殿の号を賜りました。

創建は性空上人が入山して4年後の天禄元年(970)、如意輪堂と称しました。当時この地に大きな桜の木があり、上人は天人が偈(仏を賛美する詩文)を唱えながら飛び回っている光景に出会いました。桜の木の中に観音がおられるのだと直感し、木を切り倒したり根を断ち切ったりすることなく、生きた桜に如意輪観音像を刻みました。生木の観音像は根が岩山をつかんでいるため、その上を厨子で囲い、建屋で覆ったので、懸造り(舞台造り)の建物となりました。お堂は、延徳4年(1492)、大正10年(1921)、火災に遭っており、現在の建物は、昭和8年(1933)に武田五一の設計で再建されたものです。

正面の石段に、天文17年(1548)の刻印があります。



摩尼殿 紅葉



六臂如意輪観世音菩薩座像 (鎌倉時代)



5 本多家廟所 〈県指定文化財〉

姫路藩主・本多家の廟所。5棟の廟屋は、忠勝・忠政・政朝・政長・忠国の墓。2基の五輪塔は、忠政の子・忠刻と孫・幸千代の墓です。忠刻の墓のうしろには、殉死した宮本三木之助と岩原牛之助、三木之助に殉死した宮田角兵衛の墓が並んでいます。



6 三之堂

大講堂 〈国重要文化財〉

寛和2年(986)、花山法皇の勅願により創建。法皇から書寫山圓教寺の号を賜り、その扁額が掲げられています。かつては修行僧の学問と修行の場でした。現在の建物は室町時代のもの。構造は雄大、和様を基調とし一部に唐様(禅宗様)を加えた折衷様式となっています。内陣の須弥壇には本尊の釈迦三尊像(感阿作 重文)が安置されています。



釈迦三尊像 〈国重要文化財〉 1



釈迦三尊像 〈国重要文化財〉 2



食堂 〈国重要文化財〉

承安4年(1174)、後白河法皇の勅願で創建されました。修行僧の寝食のための建物です。正面は15間(約40m)あり、「長堂」とも呼ばれ、二階建てでは日本最長の建物です。南北の柱間は、1カ所の格子戸を除いてすべてが^{しよみど}蔀戸となっています。



常行堂 〈国重要文化財〉

常行堂は享徳2年(1453)、中門は寛正4年(1463)に建てられました。修行の一つ「常行三昧」に徹する道場であり、舞台は大講堂の釈迦三尊像に舞楽を奉納するためのもの。本尊の阿弥陀如来座像は、単体では日本最古のもの(寛弘2年 1005 安鎮作)といわれています。



阿弥陀如来座像 〈国重要文化財〉



7 鐘楼 〈国重要文化財〉

袴腰付で腰組をもった正規の鐘楼で、元弘2年(1332)に再建されました。鐘は正中元年(1324)に再鑄されたものです。



8 金剛堂 〈国重要文化財〉

性空上人はこの地において金剛薩埵にお会いになり、密教の印を授けられたと伝えられます。金剛堂は、天文13年(1544)に建立。天井には天女の絵が描かれています。



天女の天井画



9 奥の院

護法堂 〈国重要文化財〉

向かって右が乙天社、左が若天社。書写山の鎮守で、性空上人に付き添って仕えたという乙天(不動明王の化身)と若天(毘沙門天の化身)の二護法童子を祀っています。現在の建物は、永禄2年(1559)に再建されたもので、同寸同型の春日造り(切妻造り・妻入り、正面に向拝)です。



護法堂拝殿 〈国重要文化財〉

天正17年(1589)に建立。開山堂参籠の行者の、護法堂への勤行、礼拝のための建物。俗に「弁慶の学問所」と呼ばれています。



開山堂 〈国重要文化財〉

圓教寺開山の性空上人を祀っています。現存のものは寛文11年(1671)に建て替えられたもの。堂内の厨子には上人の御真骨を蔵した等身大の木像が納められています。書写山一千年の歴史のシンボルとして灯明が燃え続け、朝夕欠かさず勤行がおこなわれています。軒下の四隅に左甚五郎作と伝えられる力士の彫刻がありますが、北西隅の一人は、重さに耐えかねて逃げ出したという伝説があります。



力士の彫刻



10 和泉式部歌塚

性空上人の教えにふれようと上東門院彰子の供として書写山を訪れた和泉式部が、上人に居留守を使われ、会えない無念さを歌に託しました。

暗きより暗き道にぞ入りぬべき遥かに照らせ山の端の月
弟子からその様子を聞いた上人は、この歌に感じ入って一行を呼び戻し、歌を返しました。

日は入りて月まだ出でぬたそがれに掲げて照らす法の灯のり ともしび
「天福元年(1233)十月二十六日」の刻印があります。



書写山・圓教寺

平安時代、康保3年(966)、性空上人が開いた天台宗のお寺。天台宗三大道場の一つであり、かつては山上に多くの堂塔伽藍が建ち栄え、西の比叡山とも呼ばれました。摩尼殿は六臂如意輪観世音菩薩を祀り、西国三十三箇所観音霊場の第27番札所として霊験あらたか、全国各地より参詣する人が絶えません。三之堂は「ラストサムライ」以来、数々の映画・ドラマのロケ地として知られ、奥の院では書写山千年の法灯がいまに守り続けられています。

しょうくう
性空上人 延喜10年(910)～寛弘4年(1007)

圓教寺を開いた性空上人は、京都の貴族・橘善根の子で延喜10年(910)に生まれた。10歳の頃から法華経を読み、出家の志が強かったが、その念願が叶えられたのは36歳に達してからであった。その間怠ることはなかったが、自分の出家が遅れた分だけ烈しく修業にはげんだ。まず九州の霧島山、ついで背振山に一人籠り、法華経読誦の行をつんだ。39歳の時には、法華経8巻28品を暗誦したという。のち20年を経て、真実得道の地を求めて九州を離れ旅に出、山陽道を東上し、まれにみる靈気を感じて書写山に入山した。入山の途中、白髪の仙人が現われて、「この山を書写という。山に登る者は菩提心をおこし、稀にも山に住む者は六根を浄む」と告げる。そして山上に三つの吉所を示した。第一は現在の大講堂の地、第二は今の摩尼殿の地、第三は准胝峰(白山)の地である。この老人は文殊菩薩の化身であるとされている、上人は、現在金剛堂のあるあたりに草庵を結んだ。98歳の時、弥勒寺で入滅するまで一日も休むことなく修業に励んだ。修業に対するきびしさと同様、庶民救済にも烈しく情熱をそそいだ。「上求菩提、下化衆生」上人の生涯は菩薩行そのものであり、大乘菩薩僧の名に恥じない立派な生涯であった。天台宗の三大道場の一つ、西の比叡と呼ばれ修業の山という性格とともに、民衆の悩みに積極的に向っていく山としての性格を持っていて、上人の志が今も生きることが感じられ、その二つの性格が1000年の歴史をささえてきたと考えられる。

姫路市教育委員会文化財課『書写山をたずねて』より